

現代の紅染衣装

一時は、化学染料の普及によって衰退の一途をたどっていった紅花染であったが、現在蘇った紅花染は、またすばらしい衣装をつくりあげている。



べにばなこうし どうじょい すずし
紅花格子童女衣「生絹」

人間国宝 志村ふくみ 作（京都府）



こまどんす じ きりきくはな も ようそめいのおおふりそで
駒緞子地桐菊花模様染繡大振袖

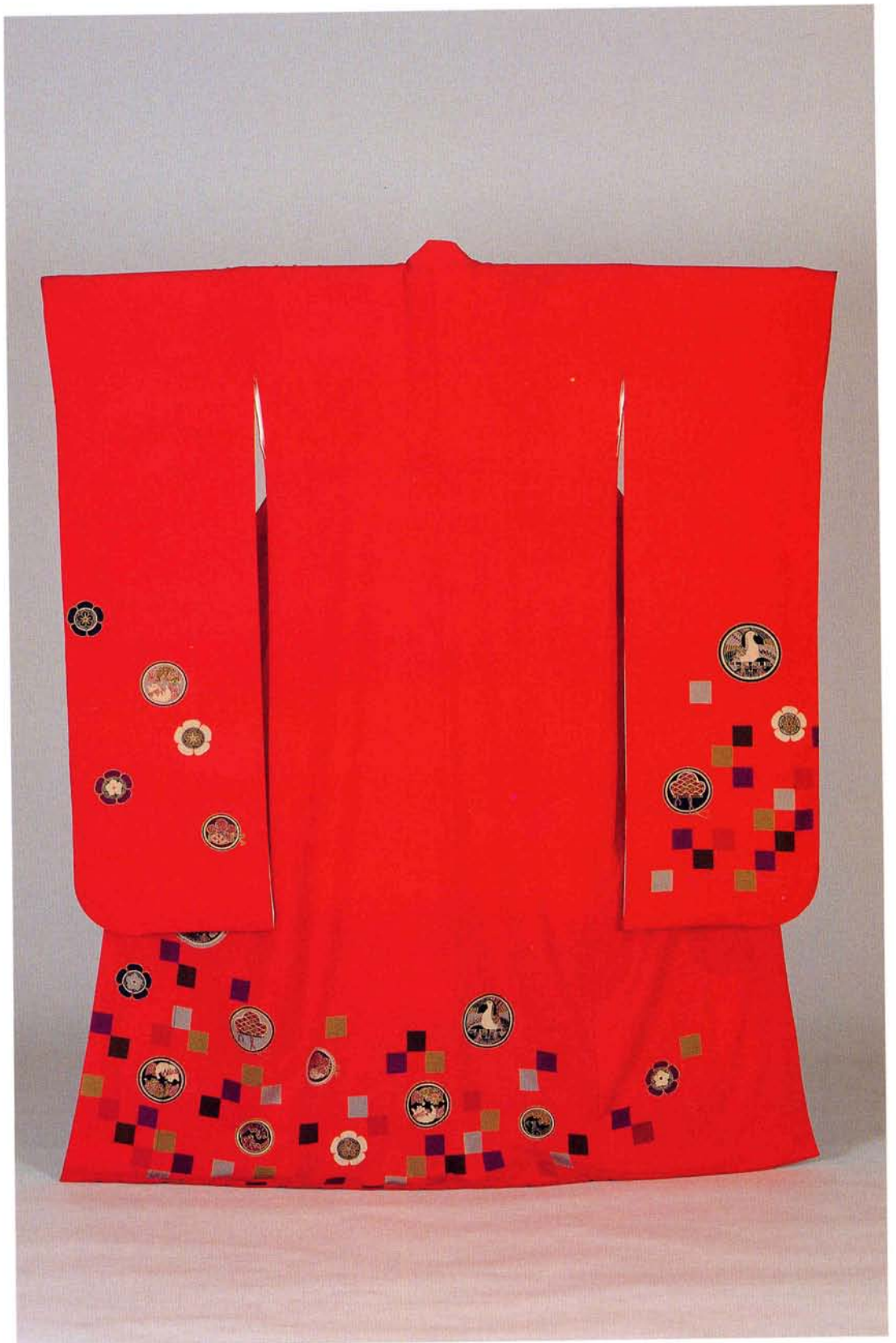
鈴木孝男 作 (河北町)



いろぬきぬいわけべにばなえまきずもんようやまとにしき
彩緯縫分紅花絵巻図文様 倭錦 戸屋優作 (米沢市)

山形県有形文化財「紅花屏風」(青山永耕筆)の生産から流通までを二部構成で織り上げた。





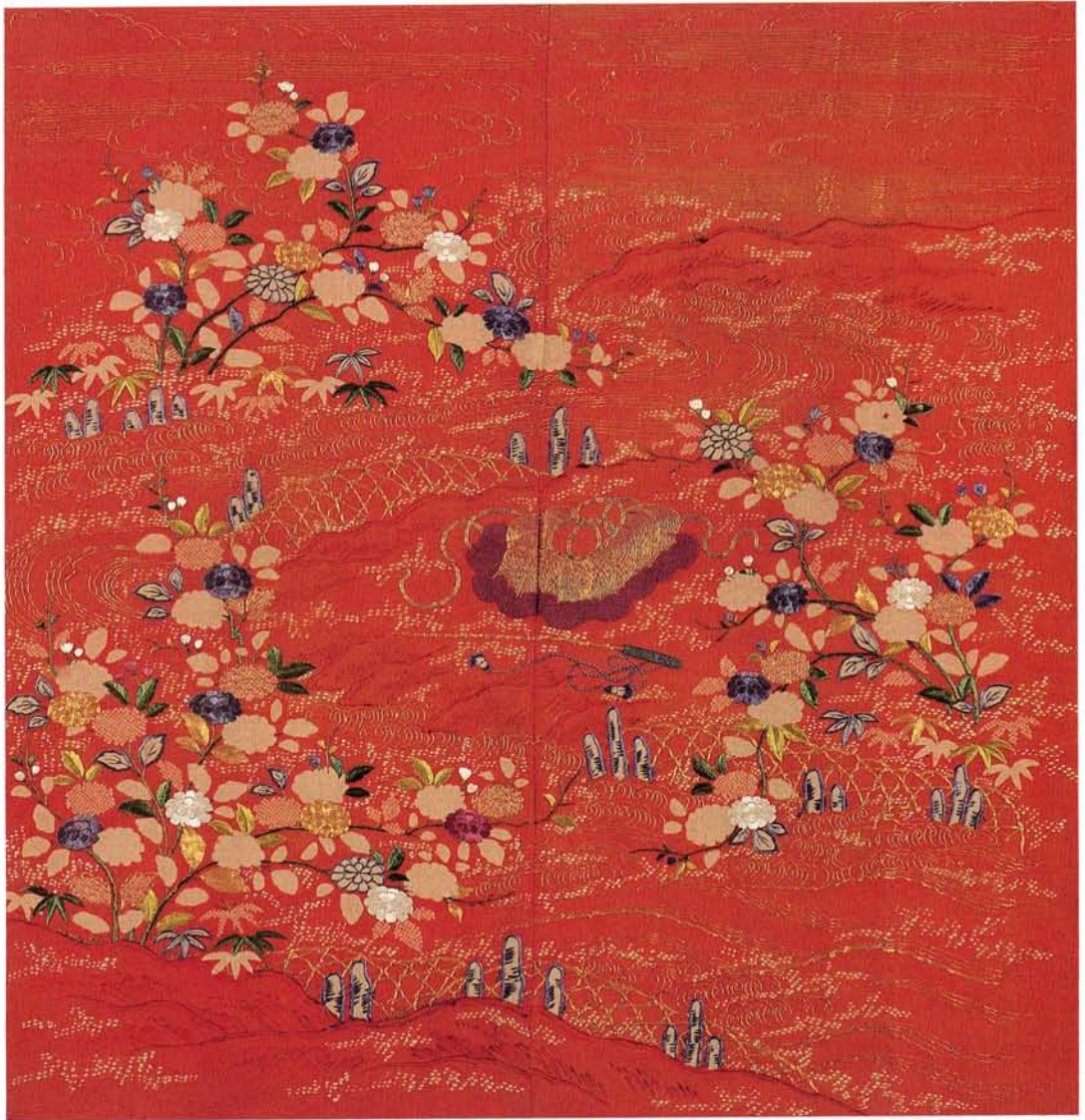
べにばな じぶがくもんようふりそで 株式会社「染竹」 作（京都市）
紅花地舞楽文様振袖

第47回べにばな国体で使用したもの

化粧

紅は、古くはこれを顔に塗り唇につけたといわれている。江戸時代元文ごろから、顔に塗るのは特殊な場合のときで、常には白粉だけとし、紅はもっぱら唇に塗ることになった。天明ごろからは紅に艶紅、笹紅という玉虫色に光る特殊なものが流行したが、幕末にはすたれたという。京紅といって京都が本場であり、皿にいれたのを紅猪口、板につけたのを紅板といい、これを紅さし指の唾でつけた。目の横につけるのを目弾き、爪につけるのを爪紅と呼び、つけ方も下唇の中心を濃く、左右を薄くさしたという。





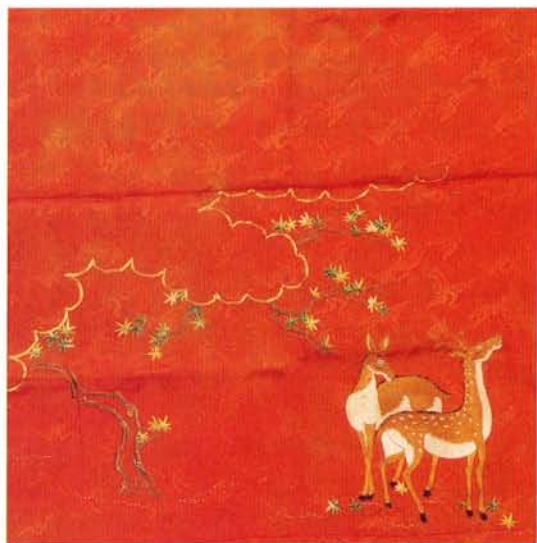
うちしき
紅染打敷

うちしき
打敷

一般に広く敷物をさし、平安中期ころから、とくに錦や綾などのみごとな裂地を用い、調度の下あるいは上を装飾するようになった。王朝文化の調度として実用を兼ねて行われ、宮廷女性の感覚がこの美しい装飾を生んだものと思われる。

ふくしき
袱紗

茶の湯の点前に用いる布で、これで茶具をふき清めたり、また客の道具鑑賞のさい、その下に敷いて用いる。また《出し袱紗》といって濃茶のときに茶わんに添えて出す袱紗があるが、この場合は金襴、緞子、間道、毛織などの名物裂が賞用される。



紅染袱紗
よきき